

闇鍋すぎて草も生え
ねえ

だめねこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二度目の人生を平穩無事に過ごしたい

他者よりも優遇されたい

楽をしたい

チートを貰って無双したい

そんな願望を心に秘めて、一度死んだ少年が、神に出会えて願ったがそんな都合の良い物は存在しなかった。

あれもこれも欲望を語るも、無理、ダメ、絶対ヤダとお断りされた少年は最後に名前を付けて貰うことは出来たが、それが元でトラブルに巻き込まれ続けて早15年

彼は過去を捨て、新天地に期待を膨らめますが・・・

今も昔もトラブルメイカーである以上決して逃れることが出来ない
転生者、異世界転移、勇者、天職、成り上がり、王道、邪道

全てが煮だった鍋に放り込まれ、混沌とした闇鍋物語の始まりだ

目次

一品目	轉生者	1
二品目	異世界轉移	15

一品目 転生者

サンタクロースが居ないのは今どきの幼稚園児でさえ知っている常識だと思う

まー俺自身も前世の小学二年の時に夜遅くにトイレに起きたらサンタの恰好をした親父にばったりあつてしまい、凄い気まずくなつてしまったのは今でも懐かしい

因みにプレゼントはハンカチだった。

それがきつかけでの出来事なんだが・・・まあ良いだろう

で、何でサンタクロース何か信じているかって言うと、ぶつちやけ信じては居ない

自分が見てない。会ったことが無いだけでいるかもなあとは思っている。

何せ自分自身が非常識な存在なのだ

自分が死んだ記憶がある

その後、神様と呼ばれる存在と話した

そして、輪廻転生を果たした

つまり二度目の人生である!!

転生特典や魔法や才能で人生イージーモードを謳歌してやろうと思ったが出来なかった

そもそも転生特典なんてものは存在しないし、魔法なんかがある世界でも無い現代社会の世界で有る訳だし、そもそも俺自身がやる気が無く怠惰と惰性で生きてるいわゆるバカ丸出しのダメ人間である

だから、一つだけで神様をお願いをした。

相手が神様であるのならば多少なりとも効果はあると信じて

二度目の人生の俺の名前を名付けて貰ったんだ

荒ぶる力を宿した姫と書いて荒姫あらし銀すず

銀はぎんとしか読めないダルオつと思うかもしれないが、意外古い小説で銀と書いて
すず読んでいる箇所があるから問題なし!!

そんな訳で、俺は転生者である。

転生者であるわけで・・・

転生者なんだけど

正直、転生なんてしなきゃよかったと今では思ってる

二度目の人生、家族とは上手くいかないし、小学・中学は最悪だったと言っても過言じゃなかった。

神様に名前を付けて貰ったのがそもそもの敗因なんだが、名は体を表すとはよく言っただものだ。

見た目が兎に角可愛い男の娘で、身長は低くて力持ち

そんな訳で家では父と母が内戦中

俺の両親はどこの誰が見ても平凡であり、普通であり、一般人である。

父の経歴だって保険調査員でも大学の講師でも元グリーンベレーの隊員って訳でもない。ただのしがないサラリーマンだ。

母も柔道家じゃないし、至って普通のパート兼主婦

そんな中でどっちにも似ていない俺が生まれたおかげで、浮気疑惑が浮上しているのだ。

ちなみに兄も妹もいるが反りが合わないから話してない

そんな訳で、家でも学校でも独りぼつちな俺は環境は置いといて気楽に自由に過ご

ていたんだけど、何でか噂ってのはどこにでも飛び交うもので、当時の小学校では俺の話題で持ちきりだった。

ふふん、モテる男は辛いぜ

まあそれは置いといて

どこの小学校でもそうだけどクラスに一人位は居る飛びぬけて可愛い女子で、しかもお金持ちのお嬢様系の奴がいるもんだ。

偏見かもしれないがそういう奴って性格がすっごい良いか、すっごい悪いかのどちらかだと思うんだよね。

ちなみに俺のクラスのは後者の悪い子で、何をするにも絡んでくる構ってちゃんだつ

た。

はじめは身長が低い事をバカにしてきて、テストの点が低いと大きな声で暴露する鬼畜っぷり。

一人でいると取り巻き共を引き連れて「友達居ないの〜？可哀想〜ぷ〜くすくす」ま
でがデフォである

止めに最も自信がある体育の授業でもバカにしたかったんだろな

しかし運動で俺に勝とうなんて10年早いわw

圧勝です。圧勝しました。圧勝・・・しちやっただよね。

今まで散々コケにしていた相手に負けたとなつて構つてちゃんのプライドに傷がついたんだよね。

それは物凄い落ち込んで、一緒に居た取り巻きも数日後にはいなくなる程だった。

それからさらに数日後たまたま構つてちゃんが誘拐される所をこれまた、たまたま見ちゃったから、仕方なく助けてあげたのは別の話

まあ、そんな訳で吊り橋効果が炸裂して構つてちゃんはヤンデレちゃんに進化しました。

Bボタンを必死に押しただけでキャンセル出来ねーし、クーリングオフって出来ねーかな・・・

出来ねーよな。出来たら中学はもう少しまともに過ごせた。

あっちに行けば喧嘩を売られ、こっちに行っても喧嘩を売られ

気が付いたら、南中の銀姫と呼ばれて不良のトップになっていた。

後で知った事だけど、裏で糸を引いていたのはやっぱり構ってちゃん、俺に勝てた奴と付き合うみたいな事を言いふらして居た。

いや、何で俺なんだよ！

だから、高校は違う所を受けに行った。わざわざ教師にも手伝って貰って、建前上は南高校だけど実際は、全く別の南之高校って進学校

もう、構ってちゃんに振り回されるのは嫌なんですう

暴力は振るいたくないんですう

るので進学先は誰にも教えてないし、引越した事も教えてないから普通に過ごせる。

そもそもスマホは持ってないから連絡は取れないし〜

俺の青春は今から始まるんだ

み
ランラン気分で玄関のドアを開けたら春の日差しと共に少し肌寒いけど風が舞い込

目の前にはヤンデレちゃんがいた

「^ずす^ずず^ず♡お・は・よ・う

俺氏膝を着いた瞬間でした。

何故だ！何故俺がこんな目に合わなきやならないんだ

黒塗りのベンツに乗りながら、窓から見える景色を眺めつつ思考するも結局はあの時
関わったのが敗因である以上逃れられぬ運命さだめなのだろう

「お嬢様到着いたしました」

「富山ありがとうございます。さあ学校に着いたし行くよ♡」

「じゃあ俺の膝から頭退かしてくれないか？」

俺の膝は枕じゃあないんだぞ

「うむむ、名残惜しいけど仕方ないね。じゃあ富山ありがとね」

「ふふ、それでは銀様、お嬢様の事よろしく願います」

はあくため息を吐きながらも、新しく通う高校を見ながらどうか平穏にキヤツキヤウフフなラブコメ青春を送りたいと切に願ったが、それは儚い幻想だった

2品目 異世界転移

南之高校は進学校である

だから生徒もほとんどが真面目で、勉強に勤しんでいるのである。

だが、進学校と言えど、やはりやかましい奴はどこにでもいる訳で、授業中に大きな声で喋って笑いを取っている。それを見て教師もため息を付きつつも、注意を行う

まーその程度なら可愛いもんだけど、それとは別に不良みたいな奴もやっぱりいる訳である。

ここ進学校なんだよな？

俺にさえ絡んでこなければいいやって思っているんだけど、正直構ってちゃん事 天
神あまがみ 愛美あみの奴がいる以上どうあっても、トラブルに巻き込まれる事は間違
いないんだよなあ

愛美はその見た目がとても可愛いらしく、身長も高めで、良い身体しているのだ。

そしてそんな彼女が俺に付きっ切りで何かと世話を焼いてくる。

今は真っ黒に染めてる長い髪を後ろでまとめて、瓶底メガネを掛けて顔を隠している
陰キヤラみたいな感じそれが俺だ。

変装の為に髪の毛を伸ばして、プラチナブロンドから黒に染め直してばれない様にはメガネが良い仕事をしているから今のところばれては居ないんだが、このクラスのとツプカースト様はなんかの会社の御曹司達らしく、愛美に好意を寄せているみたいだが、俺の存在が気に要らないようで、何かと愛美から離れたがる

良いぞもつとやれ

アイツマジ疫病神だからな・・・油断しているとどこからか危険が迫ってくる

「おい、陰キャ天神さんに近づくなんて言ったらろうが！」

油断はしていなかったんだけど、やっぱり巻き込まれた

「銀くそいつはやくぶつ飛ばして弁当食べようよ♡」

辞めてくれないかなそういう事いうのは・・・

「ああん!?六中で頭張ってた俺が陰キヤ如きに負ける訳ないだろ」

「お前の顔なんて見た事ねーよ」

こらこら愛美さんや、お口が汚いですわよ。

それにしても六中?・・・ああ、六道中学校か・・・たしか不良の巣窟で、以前愛美の所為で喧嘩した事があつたな

まっ俺には及ばないけど、そのトップの鬼島きしま 正一しようちちは意外と強かったな!

事が済んだ後は頼んでも居ないのに、アニキの第一の舎弟はこの俺だ!とか叫んでいたけど・・・無駄に暑苦しくて、イケメンで、勉強も出来て何気に女子に人気だったな。・・・身長が高いのもポイントが高いよな

「んだと!?この鬼島 正一様を知らねえーつてのか!!」

「少なくとも俺が知っている鬼島 正一とお前は全くの別人なんだがな・・・」

「めんどくさいから、今から正一呼ぶね。・・・もしもし、正一?悪いんだけどー4までダッシュで来て銀が呼んでるよ」

愛美は言うが速くスマホを取り出すと正一に電話をして一方的に用件を伝えるとそのまま切った。

「愛美さあ、正一がまるで南之高校にいるような感じで、電話しているけど「アニキ!?!」ど
うした」ええ!! なんてお前もいるんだよ」

「それは、私が此処を受けるって正一に伝えたからだよ。ま、他の馬鹿共と違って正一は
頭も良いからね。少し勉強すれば南之ぐらい余裕で受かるわよ」

俺はお前から離れたくて死ぬ気で勉強したんだけどなあ。やっぱり天才様達は
格が違うのね

「で、アニキ俺に何か用があったのか? 合ったんだよな? むしろ用が無くても呼んでく
れば、いつでも行くぜ」

まるで、大型犬が主人に構って欲しいと言わんばかり、尻尾を振ってわんわん言うてるようだ。

うん、何で俺コイツにこんな懐かれたんだっけ？

「あーその如何にも不良って顔してる奴が『俺は六中の鬼島 正一だ』って名乗ってるんだけど、六中の鬼島 正一は何人もいるのか、俺に教えてくれないか？」

俺が指を指して、さっきまでワイが天下人やあく位の迫力を出してた自称鬼島 正一はこの世の終わりみたいいな顔をしていた。

「ほおー俺の名前を語るとは・・・死ぬ覚悟は出来ているんだろうなあー中目君よお」

「ひいすみませんでしたああー」

不良顔の中目君は正一に凄まれて完全に怯えちゃってるし、謝るんなら最初からやんなきゃいいのに・・・

「ま、正一謝ってるんだから、許してやれば？」

「だけど、アニキにも迷惑かけたしキッチリ落とし前は付けないと示しがつかねーよ」

「おめーがヤクザの息子なのは知ってるし、そういうことに拘りを持っているのも分かっているつもりだけど、俺が許してやれって言うてんだガタガタ抜かすんじゃねーぞ

正一！」

「うぐう！わ、わかったよ。おい、中目今回はアニキの顔を立てるが、次は必ずケジメ付けるからな」

まったく血の気の多い舎弟を持つと苦労するぜ

正一にそう言われた中目君はそういうと素早く俺等から離れていった。

ま、完全に正一にビビっているんだけど、何でか俺を見る目には憎しみが籠っている。

恋は人を盲目にするっていうけど、やっぱり愛美がいるだけで俺に被害が来るのは納

得いかないな

やっぱりこんな変装しているからなめられやすいのだから？・・・なめられやすいんだらうな

因みにこの出来事は入学してまだ一週間しか経っておらず、鬼島 正一の制御が出来るのは俺だけと周知されてしまい、次の日には我がクラスに特例として正一が編入される事になった。

余談だが、席が俺の前の為、正一は授業中だろうが関係なく常に後ろを向いて話しかけてくる。

そのことに教師は嫌な顔をするが、文句を言うことが出来ずにいた。

正一が怖いってのもあるのだが、学年一位の首席の一人でもあるのだ。

マジこいつ文武両道ステキ抱いて・・・抱いては嘘です。

そこいくと俺は教師から、バカ可愛いって感じのような目で見られている。

まあ半分かんない所は正一か愛美に聞けば教えてくれるから問題はないな、

そんなこんなで学校生活が一年を経過し、2年生になった時だった。

相変わらず、トップカーストは愛美から離れろと俺に行ってくる

いや、俺に時間を使わないで、愛美の方に気を使えよ！

つーか、面倒だから押し倒してやっっちゃえよ

「そんな訳で愛美とお坊ちゃんをカップルにするにはどうすれば良いかなんか案は無い
か正一」

「そんなもんは縁があれば嫌でも結ばれますよ」

つまり現状は縁すらないのか・・・

「お坊ちゃんには期待していたんだけどなあ」

そうこうしていると授業の終了のチャイムが鳴り始めた。

時刻はお昼

お昼休み

正一が机を反転させて俺の机にくっつけて、お弁当箱を2つかバンから出す

それを俺は無言で受け取り、蓋を開ける

お弁当の内容はのり弁でおかずはチキン南蛮、エビフライ、オニオンリングで合った。

俺はカバンからタルタルソースを取り出し、おかずにぶっかけて食べようとした時である

愛美がお弁当袋を2つ持って俺の所にやってきた。

「銀ーそんな油分が多いものばかり食べてちゃだめだよ。これも食べてね」

愛美はそういうとお弁当箱を差し出す

それを無言で受け取ろうとした時である

「荒姫は2つも弁当食べれないだろ？ だったら僕が天神さんのお弁当を食べてあげるよ」

歯をキラキラさせながら、愛美の弁当に手を伸ばすトツプカーストの国津くにつ 大地だいち

学年主席の一人であり、なんとかって会社の御曹司って話を聞いている。

因みに主席は4人居て、4人共同じクラスである。

正一、愛美、国津、ともう一人が烏丸からすま 賢治けんじ

烏丸は基本教室で本ばかり読んでる奴、たぶん読破した本の数ならクラスで一番多いじゃないかな？ 偏見だけど・・・まー話した事無いからどんな奴かは全く分からないけど、多分他の主席4人以外は全員玉ねぎか芋にしか見えないだろうな・・・ま、芋と言うなら勝手に言いな

話がそれたけど

「これは銀の為に私が作った物だよ？ 腹が減っているんだったら、その辺の草でも食つてろカス」

「クツ、でも荒姫もそんな小さい身体で2個も食べれないだろ？そうになると天神さんが可哀想だし、僕に譲ってくれないかな？」

「何言ってるんだ国津？別段無理してお昼に食わなくとも、持って帰って家で食べるから問題ないぞ」

「えー！今食べてよ。すっごい自信作だし、夜は夜で作って上げるからお願い」

「そ、そうだよ。お昼のお弁当なんだから食べないのは失礼だぞ。」

あれ、国津お前食いたいじゃなかったのか？

そんなことを考えて居る時だった。

愛美の弁当が突如光だして、クラスはまぶしい光に包まれた

気が付くと見知らぬ建物の中に何人かのクラスメイトが居た。

周りは剣や杖を握っている人たちに囲まれている状態

思っただけだ一つ

あ、これラノベの異世界物だわ・・・

前略

暴力が嫌で平和な学校に行ったのに、戦う系の異世界転移に巻き込まれました。

レベルとかステータスとか天職とか俺だけ使える○○スキルとか、弱いクラスメイトがなんか覚悟がんで決まりで突然覚醒とかラスボスは魔王では無く、この世界を作った神様だあー。みたいなのが始まるのかな？

うん、オラ、ワクワクして・・・こないっす。

そんな力こそが正義の“世紀末な世界”で何が楽しいのだろうか、それをガチで楽しめるような人間はもはや壊れてるとしか思えないなあ